一

次の文は、ロシア文学研究者が自らのロシア語学習歴について述べたものである。これを読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

それから、ＮＨＫのラジオでロシア語講座を聞こうと思い、近所の本屋でテキストを買ってきた。テキストを見ると、月曜から水曜までが入門編、木曜と金曜には応用編をやっている。普通なら入門編をひととおり聞いてから応用編を聞くべきなのかもしれないが、応用編の内容を見たらとても面白そうだったので、欲張ってそちらも聞くことにした。というのもちょうどそのとき、沼野充義先生が吟遊詩人ブラート・オクジャワの歌を読んでいたのだ。たとえば『祈り』と題されたこんな歌である――

神よ　人々に　持たざるものを　与えたまえ
賢い者には　頭を　臆病者には　馬を
幸せな者には　お金を　そして私のことも　お忘れなく……

「でも賢い者なら頭はすでに充分でしょうし、臆病者は馬をもらってももてあましてしまうでしょう、不思議な歌ですね」と解説する沼野先生の飄々（ひょうひょう）とした語り口と、その一風変わった詩に、意味がよくわからないながらも妙に惹（ひ）かれた。なにより優しく心地よいオクジャワの歌声には、いつまでも聴いていたくなるような魅力があった。

それから、少し大きめの本屋へ行って教科書を物色した。ラジオ講座の入門編をやっていたのが宇多文雄先生だったので名前になじみのあった宇多先生の教科書を買い、ついていたＣＤを丸暗記した。歩きながらウォークマンで聞いていると、否定（ひてい）生格（せいかく）の過去・現在・未来をすべて「お金」で説明する例文――「金がない、金がなかった、金がないだろう」が登場し、くすくす笑っているうちにいつのまにか覚えていた。ＣＤの最後では宇多先生が自らロシア民謡を歌っており、その哀愁ある歌詞が心

に残った。

そんなふうにして基礎だろうと応用だろうと歌だろうと節操なくロシア語という言語に取り組んで数年が経ったころ、単語を書き連ねすぎて疲れた手を止めたとき、突然思いもよらない恍惚(こうこつ)とした感覚に襲われてぼうっとなったことがある。なにが起こったのかと当時の私に訊(き)いても、おそらくまともには答えられなかっただろう。そのくらい未知の体験だった――「私」という存在が感じられないくらいに薄れて、自分自身という殻から解放されて楽になるような気がして、その不可思議な多幸感に身を委ねるとますます「私」は真っ白になっていき、その空白にはやく新しい言葉を流し入れたくて心がおどる。ごく幼いころに浮き輪につかまって海に入ったときのような心もとなさを覚えながら、思う――「私」という存在がもう一度生まれていくみたいだ。いや、思う、というよりは感覚的なもので、そういう心地がした、というのに近い。この時期、それから幾度かそんな体験をした。

いま思えばあれは、語学学習のある段階に訪れる脳の変化からきているのかもしれない――(1)言語というものが思考の根本にあるからこそ得られる、言語学習者の特殊な幸福状態というものがあるのだ。たぶん。

気づけば、進路というものが自分にあるのならロシア語しかない、と気負うようになっていた。思春期の気負いというのは不思議なもので、いちかばちか、どんな荒唐無稽な夢にでも向かっていける気がする。そのころの自分にとっては、選んだ道で「本気を出せるか否か」というのがいちばん大事な基準だった。(2)加えていうなら、逃げ場がないような崖っぷち、という場所を探してもいた。うちに伝わっていた曽祖父の話を思い出したせいもあるかもしれない。戦後まもなくに亡くなった曽祖父については、一九世紀末の日本にしては珍しく若いうちに英語圏に留学し、帰国後は英文学の翻訳をやっていたということ以外は知らなかったが、ただ「ものすごく変わった人だった」と聞いていた。でも、いいじゃないか。本気でやれるなら。世間一般で普通とみなされている道を外れようとも、ものすごく変わった人だと思われようとも、だからなんだっていうんだ。

私はさらに大規模な書店に出かけ、大きな公立図書館にも通い、ロシア語やロシア文学について手に入る本を片っぱしから手にとった。仲良しの女友達と一緒に本屋へ行くと「ほんと、なっくはロシア関連の本をみつけると見境がないね」と笑われた

（「なっく」というのは小学生のころからの私のあだ名だ）。高校卒業後、いっときロシア語の専門学校にも通ったが、やはりロシアに行きたいという思いが強くなった。

そうして私がペテルブルグ行きを決めたのは、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて――ちょうど二〇歳になる冬のことだった。

当時の私がどのくらいロシア語ができたのかといえば、とりわけ会話にかんしてはてんでだめだった。もともと文章を読んだり書いたりするのが好きだった私は社交的なほうではなく、いわゆる世間話がものすごく苦手である。ただ、人の話に耳を傾けるのは読み書きにも負けないほど好きで、気の置けない仲の友人数人と集まればひたすら黙って友人たちの会話を聞いているだけで幸せな気分になってしまう（ので、よけいなにも喋らない）。ロシア語を学ぶにしても得意なところから好き勝手に学んだので、この傾向は強まるばかりだった。ペテルブルグに行って半年ほどしたころ、検定試験を受けた。ロシアが主催している試験で、日本でも定期的に開催されているが、受けたのはそのときが初めてだった。まずは大学受験資格を得るために必要なレベルの級を受験した。結果として合格はしたのだが、会話の試験だけは落第点だった。即不合格ではなく特別に会話のみの追試を許された（追試はまあ、なんとか合格した）のは、聞きとりの点数がよく、筆記が満点だったからだ。つまりは聞き分けのいい犬のようなもので、聞けばだいたいなんでもわかるのに、うまく言葉が出てこないのである。ガウ。

それからも意識的に会話をがんばったわけではないが、ある時期から言いたいことがあればいくらでも語れるようになった。けれど私はいまでも「聞く」のがいちばん好きだ。

新しい言語を学ぶ――その魅惑の行為を前に、(3)人は新たに歩きはじめる。母語ではとうにありふれたものになっていたものごとを、もうひとつの言語の世界でひとつひとつ覚えるたびに、見知った世界に新しい名前がついていく。それはオクジャワの『祈り』のようでもある――賢い者には頭を、臆病者には馬を……(4)この歌の解釈は多様で、たとえば「賢い者には頭」というのは、賢さとは心で悟るものだから頭脳とは別物だということを、「幸せな者にはお金」が必要なのは、幸福か否かはお金の問題ではないことをそれぞれ暗示しているとする説や、そうではなく全体として一般常識的な固定観念に対する皮肉なのだとする

説などがある。けれどもそれらの解釈とはまた別の層にある要素として、この詩には言語への希求のようなものがあるように思えてならない。この詩を読もうとすると、ひとつひとつの単語の辞書的な意味を疑わざるをえなくなり、賢さや幸せという、普段は自明のものと認識している言葉の意味を考えなおすことになる。そうして緩やかにつながる言葉同士の関連性に目を凝らし、意味の核心に迫ろうとするが、(5)核心は近づいたかと思えばまた遠ざかる。「言葉」と「意味」はひとつにはならない、でもだからこそ面白い——そんな感覚が歌にのって伝わってくる。

（奈倉有里『夕暮れに夜明けの歌を——文学を探しにロシアに行く』より）

問一 傍線部(1)はどのような状態を指すのか、説明せよ。

問二 傍線部(2)から読み取れる筆者の心情を説明せよ。

問三 傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)について、筆者はこの歌をどのように考えているのか、本文全体を踏まえて説明せよ。

問五 傍線部(5)のように筆者が言うのはなぜか、『祈り』の歌詞に触れつつ説明せよ。

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

芸術上でわれわれが常に思考する永遠といふ観念は何であらう。永遠性とか、悠久性とかいふのは一体何の事であらう。仮に類似の言葉を求めてみると、永遠、永久、悠久、永続、無限、無終、不断、不朽、不死、不滅といふやうなものがあり、どれを見ても其の根本の観念として時間性を持たぬものはない。

永遠とは元来絶対に属する性質で、無始無終であり、無限の時間的表現と見るべきであらう。本来これは神とか、物質自体とかいふ観念以外には用ゐられない言葉であるはずで、もともと人間の創作に成る芸術圏内に之を使ふのは言葉の転用に過ぎない。或る一つの芸術作品が永遠性を持つといふのは、既に作られたものが、或る個人的観念を離れてしまつて、まるで無始の太元から存在してゐて今後無限に存在するとしか思へないやうな特質を持つてゐる事を意味する。*夢殿の観世音像は誰かが作つたといふ感じを失つてしまつて、まるで天地と共に既に在つたやうな感じがする。そして天地と共に悠久であるやうに思はれる。恐らく芸術の究極の境は此処に存するのであらう。われわれ芸術にたづさはるものが此の永遠性を日月のやうに尊崇し、今日あつて明日は無いやうな芸術的生命から脱却したいと思ふのは、あながちただ*斗筲の徒たるが故ばかりではなく、(1)至極当然なことである。

ところで(2)其処へニヒルが頭を出す。永遠などといふ事があてになるだらうか。不朽、不滅などといふのはあはれな形容詞に過ぎなくはないか。法隆寺金堂の壁画は毎日毎夜崩壊をつづけてゐる。エジプトの古彫刻とて高が五十世紀の年月を経たに過ぎず、ギリシヤ、ローマの古美術も大半は残欠であり、天地の悠久に比べて斯の如きものを永遠と称するのは大に甘い気休めではないか。天地といへども壊滅は予約されてゐるし、第一、自己が死んで此世に消滅した後の作品の不朽と否とを心にかけるといふ事自身が既に卑しい考ではないか。さういふ関心事一切が一種の虚栄であり、空の空なるものを欲する弱さではな

いか。芸術に関して永遠性といふやうなことを口にするのがそもそも迂愚であり、荒唐の言を弄するに外ならないではないか。芸術は製作時に於ける作者内面の要求を措いて他に考へる余地を持たないのが本当ではないか。

そこで又考へる。芸術の求める永遠性そのものが単に時間の問題にとどまるならば此の疑問も至当である。そしてただ時間を凌がうといふ慾望に駆られることが芸術家の焦心事であるならば、それは確かに卑俗の心であるに相違ない。永遠性とは果して時間の問題か。しかし、どうも違ふ。芸術の実際を思ひ合せると、どこか此の推考には間違がある。

(3) 芸術に於ける永遠とは感覚であつて、時間ではない。これが根本である。

一つの芸術作品の持つ永遠性とは、(むろん価値の持続性を含むが、)その作品の力が内具する永遠的なるものの即刻即時に於ける被享受性であつて、決して永遠時への予約や予期ではない。その不滅とは不滅を感ぜしめる力であつて、決して不滅といふ事実の予定認識ではない。持続を瞬間に煮つめた、言はば、無の時間に於ける無限持続の感覚なのである。明日焼き棄てられる事の決定してゐる作品にもわれわれは永遠を感ずることが出来るであらうし、有ると思へばあり無いと思へば無いやうな、あるかなきかの感動をうたつた詩歌にもわれわれは永遠を感ずる。前者は物質上、後者は内容上に永遠を拒否してゐる場合である。それ故、芸術が永遠を欲するのは長命を欲するのでなくして、性格を欲するのである。芸術は美を求めて進むものであり、その美の奥にはおのづから永遠を思はせるものが存在する。美は常に或る原型へと人を誘導する性質を持つてゐるからである。

永遠の時間性は又空間性に変貌して高度な普遍性につながる。此の普遍性は所謂通俗性とは峻別せらるべきもので、人間精神の地下水的意味に於ける遍漫疏通の強力な照応であつて、これなくしては芸術の人類性が成立しない。およそ芸術上の大きさとは此を意味する。(4) 真に独自の大きさを持つ芸術作品は直ちに人にうけ入れられない。必ず執拗な抵抗をうける。不可解のためである事もあり、解り過ぎるためである事もある。しかも太陽が霜を溶かすやうにいつの間にか人心の内部にしみ渡る。

真に大なるものは一個人的の領域から脱出して殆ど無所属的公共物となる。有りがたさが有りがたくなくなるほど万人のものとなる。「*ベトオフエンは死んだ」と言はれる頃、ベトオフエンは人類の心に隈なく住むに至る。芸術上の大を持たない作品は特殊の美として存在するが斯の如き悠久にして普遍の感を持たない。偏倚の美乃至*パテチツクの美は斯の如き形而上的の永遠を持たない。しかも世界に星の真砂の如く、*恒河沙数の如くきらめく(5)さういふ明滅の美こそ真に大なるものを生ましめる豊饒の場となるのである。

芸術上の此の永遠性が何処から来るか。こればかりは如何に論議を重ねても人間の*揣摩の及ぶところでない。精神力、然り。叡智、然り。大愛、然り。熱情、然り。純無垢、然り。技能、然り。結局人間精神と技術芸能との超人的な境に於ける結合から来るのであらうと今のところ平凡に考へる外はない。

(高村光太郎「永遠の感覚」)

注(*)

夢殿＝法隆寺夢殿。

斗筲の徒＝器量の小さい者。

ベトオフエン＝ベートーヴェン。

パテチツク＝感傷的な。

恒河沙数＝ガンジス川の砂の数。極めて数が多いことを意味する。

揣摩＝推測。

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)について、ここでの「二ヒル」とはどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部(4)はどういうことか、説明せよ。

問五　傍線部(5)はどういうことか、説明せよ。

三

次の文は、『とはずがたり』の一節である。後深草院の女房であった作者は、今は御所を出て出家の身となっている。これを読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

さても故大納言身まかりて今年は三十三年になり侍りしかば、形のごとく仏事など営みて、例の聖のもとへ遣はしし諷誦に、

(1)つれなくぞめぐりあひぬる別れつつ十づつ三つに三つ余るまで

神楽岡といふ所にて煙となりし跡を尋ねてまかりたりしかば、旧苔露深く、道を埋みたる木の葉が下を分け過ぎたれば、石の卒塔婆、形見がほに残りたるもいと悲しきに、「さてもこの度の勅撰には漏れ給ひけるこそ悲しけれ。我、世にあらましかば、などか申し入れざらむ。続古今よりこの方、代々の作者なりき。また、わが身の昔を思ふにも、竹園八代の古風、空しく絶えなむずるにや」と悲しく、最期終焉の言葉など数々思ひ続けて、

古りにける名こそ惜しけれ(3)和歌浦に身はいたづらに海人の捨て舟

かやうにくどき申して帰りたりし夜、昔ながらの姿、我もいにしへの心地にて相向かひて、この恨みを述ぶるに、「祖父久我の大相国は「落葉が峰の露の色づく」言葉を述べ、我は「おのが越路も春のほかかは」と言ひしより、代々の作者なり。外祖父兵部卿隆親は、鷲尾の臨幸に「今日こそ花の色は添へつれ」と詠み給ひき。(4)いづ方につけても、捨てらるべき身ならず。具平親王よりこの方、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶えせず」など言ひて、立ちざまに、

なほもただかきとめてみよ藻塩草人をもわかず情けある世に

とうちながめて立ち退きぬと思ひて、うちおどろきしかば、空しき面影は袖の涙に残り、言の葉はなほ夢の枕に留まる。

(5)これより、ことさらこの道をたしなむ心も深くなりつつ、このついでに人丸の墓に七日参りて七日といふ夜、通夜して侍りしに、

契りありて竹の末葉にかけし名の空しき節にさて残れとや

（『とはずがたり』より）

注（＊）

故大納言＝作者の父、大納言久我雅忠。

諷誦＝諷誦文。仏事にあたり、仏や僧などに布施を供える際に添える文章。

この度の勅撰＝第十三番目の勅撰和歌集『新後撰和歌集』。

続古今＝第十一番目の勅撰和歌集『続古今和歌集』。ただし、ここは「続後撰」（第十番目の『続後撰和歌集』）とあるべきところである。

竹園八代＝「竹園」は親王家の血筋のこと。雅忠は具平親王より数えて八代目にあたる。

久我の大相国＝太政大臣久我通光。

落葉が峰の露の色づく＝『新古今和歌集』所収の和歌を指す。

おのが越路も春のほかかは＝『続後撰和歌集』所収の和歌を指す。

兵部卿隆親＝四条隆親。

鷲尾の臨幸＝「鷲尾」は京都市東山区の霊山付近。ここに四条家の別荘があり、後嵯峨院が花見のために御幸をした。

今日こそ花の色は添へつれ＝『続古今和歌集』所収の和歌を指す。

人丸＝柿本人麻呂のこと。和歌の神として崇められた。

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)を、適宜ことばを補いつつ現代語訳せよ。

問三　傍線部(3)を、適宜ことばを補いつつ現代語訳せよ。

問四　傍線部(4)はどういうことか、説明せよ。

問五　傍線部(5)のようになったのはなぜか、直前の和歌の内容に基づいて説明せよ。